

書 評

「家畜糞尿処理・利用の手引き 1999」

企画・編集：北海道立農業・畜産試験場

発行：1999年3月31日

酪農学園大学 干場 信司

「北海道と本州で基本的に大きく異なる」ということが、農業や畜産ではよく見られることであるが、家畜ふん尿の管理もこの例に漏れない。

例えば、「家畜排泄物法」が昨年11月に施行され、野積み・素掘りが禁止となったが、この法律は本州向けの規制であることが見て取れる。なぜなら家畜ふん尿の排出・還元に関しての量的規制は行わずに、処理施設のみを要求しているからである。北海道では野積み・素掘りが許されてよいと言う意味ではないが、還元する自己所有地を持たない本州の畜産経営の実態を反映した法律であると言えよう。

国の中央で作られる家畜ふん尿の管理に関する資料には、往々にして、自分のところで生産したふん尿を自分で利用するという概念が欠如したものが多い。家畜ふん尿の『処理』はあるが、自分のところでの『利用』はないのである。そのため、それらの資料に従って家畜ふん尿管理を考えると、自己所有地でふん尿を利用するのであれば必要のない処理施設が、いつのまにか導入されてしまうことがある。これは、北海道の酪農経営自体が本州のそれと似てきているための結果でもあるのであるが、その傾向を見直すという意味からも、どうしても本州とは異なる北海道の実態にあった処理・利用のための普及書が必要であった。

このような情勢の中で、北海道立の農業および畜産関連の試験場の面々が叡知を集積して出版した「家畜糞尿処理・利用の手引き 1999」は、極めてタイミングの良い、そして内容的にも北海道の実情に即した価値の高い普及書である。

本書は、北海道立の試験場が平成6年度から10年度にかけて実施した研究プロジェクト(通称「ふんプロ」)の成果と、既往の成果をも合わせて体系化し、手引き書としてまとめたものである。

本書は、基礎編、実用編および事例編の3つの部分から構成されている。第1の基礎編では、関連法規や環境容量、経営的視点を含めた家畜ふん尿の処理・利用に関する基本的な考え方がまず述べられている。次に基礎的な知識として、堆肥化の過程や還元に関する基本事項等が、また、処理機械・施設に関する基本的知識として、ふん尿の性状に合わせた処理方式や貯留施設・固液分離機等に関する考え方の整理が示されている。さらに、放牧との関連についても触れられている。

第2の実用編では、まず飼養管理方式別のふん尿処理方法について、ふん尿の性状に合わせた具体的な処理方法が述べられている。次に、ふん尿の施用・還元に関する具体的方法が掲載されているが、本書の中ではこの章に最も多くのページが用いられている。これは前述したように、自己所有地にふん尿を還元している北海道ならではの重要な部分である。実用編の最後には、発酵床方式によるふん尿処理が示されている。このトピックもこれまではなかった特徴である。

第3の事例編では、畜舎の種類・規模別に、また家畜やふん尿の管理方式別に9つの事例が紹介されている。それぞれの事例には、経営の概況やふん尿処理方式の特徴が述べられているが、それだけではなく、問題点や今後の改善計画も示されており、現場サイドでは参考になるものと思われる。

全体を通して、図表がふんだんに用いられ、またカラーも有効に使われており、とても見やすい普及書に仕上がっている。

本書を作るに当たっては、数多くの議論と調整の機会を必要としたものと想像する。関連諸氏の努力に敬意を表するとともに、次のバージョンアップを期待するものである。